



# 新毎日

8月5日(金)

2016年(平成28年)

美術展には足を運

ぶ方だが、著名な外国の芸術家の展覧会  
の一方で、明治期に活躍した日本人画家の展覧会  
が、途切れることなくコンスタントに続いている。

この春は東京国立博物館で黒田清輝(1866~1924年)の生誕150年記念の展覧会が、昨春秋は神奈川県立歴史博物館で五姓田義松(1855~1915年)の没後100年展がもたれ、話題を呼んだ。ここ数年でも藤島武二、高橋由一、中澤弘光



西川 恵

金言

kin-gon

らを取り上げられた。

しかし日本美術史が専門の日仏会館(東京都渋谷区)フランス事務所長のクリストフ・マルケ氏(51)は「近代明治の美術が広く日本で評価されるようになったのはここ20年」と言う。

同氏は89年、東大に博士課程で留学し、洋画家の浅井忠(1856~1907年)をテーマにした。しかし当時、東大には日本近代美術の講座はなく、友人からも「明治の美術をやっても就職できないよ」と言われた。「日本の美

## 近代明治美術の魅力

術は江戸まで。近代明治は西洋のものまねで、日本のオリジナリティーがないと見られていました。私には和洋折衷のそこが面白かった」

同氏は浅井忠がフランス留学時代に交流していたフランス人芸術家や、浅井忠と工芸品のかかわりを解明する中で、多くの史料や作品を発見。この研究を通して、浅井忠は仏芸術潮流アールヌーボーを取り入れつつ、江戸時代の琳派などの美術をデザインとして再解釈して作品としていた「日本の現代デザインの父」

と位置付けた。「浅井忠は和とモダンの融合を図った」と同氏を見る。

指導教官だった高階秀爾教授(現・大原美術館館長)はこの研究を高く評価し、26歳の時、外国人では初めて美術史学会で発表した。

明治の美術への評価が始まるのは90年代から。マルケ氏は「現在の明治期の美術展の隆盛は夢のよう。明治は西洋のみねだけではないと客観的に見られるようになったからではないか。明治へのノスタルジーもある」と語る。

同氏は5年の任期を終え、9月から古巣のパリの仏国立東洋言語文化大学で日本美術などを講義する。

最近出版した「大津絵 民衆的風刺の世界」(角川ソフィア文庫)が置き土産となる。江戸から明治にかけ、大津の職人によって描かれた庶民絵画の美術史的意味を分析した。昨年、母国で出版したものが評判を呼び、日本語版になったのだ。テーマはまだまであり、明治の魅力から離れられない。(客員編集委員)